相貌ステレオタイプに基づく顔の記憶の変容

西村聡生
(安田女子大学心理学部)

研究の目的

記憶は，他の情報が与えられたとき，その情報を取り入れて変容することがある（Loftus et al., 1978）。本研究では，性格特性と相貌特徴とを結びつけるステレオタイプに着目し，人物に対する性格の印象に基づく顔の記憶の変容が生じるか検討した。性格―相貌ステレオタイプの予備調査結果より，性格特性として優しい／厳しいを操作し，相貌特徴として目・眉・口角に焦点を当てた。

方法

女子大学生 20 名が実験に参加した。最初に人物の印象操作のため，女性の顔写真とともに，半数の参加者には優しい性格を印象づける文章を，残り半数には厳しい性格を印象づける文章を呈示した。参加者は，人物の性格について受けた印象を，「優しい」「頼りない」「厳しい」など 10 項目について 5 段階で評定し，続いて，ひらがな，カタカナを鏡文字で書く妨害課題を 3 分間行った。最後に，印象操作時に呈示した顔画像の目を小さくたれ目に，口角を上向きに，眉を細く平行に加工した画像を呈示した。参加者は，Adobe Photoshop CC 2018 を使用し，画像の目の大きさ，目の角度，口角，眉を操作して，最初に呈示された女性の顔を再現するよう求められた。目の大きさ，角度，口角はそれぞれ，バーを操作することで自動的に画面上のパーツが変化した。操作後の数値（-100～+100；数値が大きいほど目が大きくなり，角度はつり上がり，口角は上がる）を記録した。眉は画像修正ツールを使ったため，上記のような数値化はされなかった。そのため，37 名の女子大学生が，修正後の写真の眉部分を切り抜いた画像 20 枚について，眉の太さ（細い―太い）と角度（たれ下がっている―つり上がっている）を 7 段階で評定した。

結果

文章中で示唆された性格（優しい，厳しい）間での優しさおよび厳しさの印象評定値の差について検討するため，対応のない t 検定を行ったところ，優しさでは優しい条件が，厳しさでは厳しい条件が，有意に高く評定されていた（$ps < .001$）。

再現された画像の各特徴（目の大きさ，角度，口角，眉の太さ，角度）についても同様に，対応のない t 検定を行った。優しい条件では，厳しい条件に比べて，目はよりたれ目であり（$t(18) = 3.96$, $p = .001$），口角はより上がり（$t(18) = 2.60$, $p = .018$），また眉はよりたれ下がっている傾向がみられた（$t(18) = 1.99$, $p = .062$）。目の大きさ（$t(18) = 0.29$, $p = .777$），眉の太さ（$t(18) = 1.33$, $p = .200$）には，条件間に有意差は認められなかった。

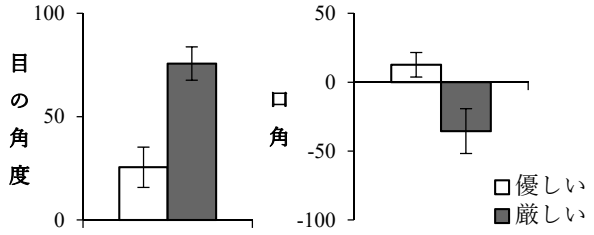

図 1. 性格条件ごとの目の角度（左）と口角（右）の平均変化量。エラーバーは標準誤差を示す。

考察

同じ顔であっても，優しい印象の人物は，厳しい印象の人物に比べて，たれ目（眉）で，口角が上がって記憶された。これは，予備調査での性格―相貌ステレオタイプと合致する。一方，優しいあるいは厳しい性格の人物から連想される相貌特徴としてほとんどあがらなかった目の大きさや眉の太さは，性格の印象による記憶の違いはみられなかった。本研究は，性格の印象からステレオタイプに基づいて顔の記憶が変容することを示した。相貌ステレオタイプに基づく記憶の変容は，表情に関連する可変特徴（口角）のみならず，比較的不変と考えられる特徴（目の角度）でもみられた。

※本研究の一部は，中山慎稀さん（安田女子大学）の 2018 年度卒業研究に基づく。